

学会開催報告

第15回日本アクション看護学会学術集会

会長講演

## 看護における多様性と感情

**寶田 穂**

(武庫川女子大学看護学部 教授・学術集会長)

会長講演「看護における多様性と感情」  
2016年9月3日(土) 10:10～10:50  
日下記念マルチメディア館 マルチメディアホール  
講演：寶田 穂(武庫川女子大学看護学部 教授)  
座長：森 千鶴(筑波大学医学医療系 教授)

## 多様性と患者理解

私が依存症のケアに関心を持ち始めたのは、1990年代後半でした。当時、勤めていた依存症専門病棟のない病棟に、覚せい剤など薬物依存症の患者さんが入院されてきたのですが、治療プログラムもなく、看護師の中では「薬物の人は、病気とは思えない」といった声もありました。今は、薬物依存症をもつ人（以下、依存症者と置き換えて記載します）への治療プログラムも開発され、そういった治療プログラムに看護職者が携わっているところもあると思います。ただ、業務として治療プログラムに参加しなければならないけど、やっぱり依存症者は嫌だな、できるだけ避けたいな、といった思いを抱いている看護師もいると思います。依存症者を感情的に受け入れられないとか、関わりたくないとか、ネガティブな感情を抱いている看護師は少なくないように思います。

依存症者へのケアに携わるにあたって、看護師の感情の問題を考えるのはすごく大事なことだと思います。依存症者に対する感情は、人によって非常に様々です。今の世の中、人々の生活や価値観などの多様化がすすみ、いろいろな生き方があります。看護教育の中では、患者さんを理解し、患者さんの立場になると、私も言っていますが、果たして、この多様性がある社会の中で、個人をどう理解していけばよいのでしょうか。

例えば、私が初めて看護師として働いたのは、40年近く前ですが、当時は「家族は支え合うべき」と思っ

ていました。家族には、お父さんがいて、お母さんがいて、おじいちゃん、おばあちゃん、兄弟、…。そういった原型があり、お互い支え合う。現在では、単身者がすごく増えています。家族のあり方も変化しています。家族だけでなく、現在の社会を考えると、納税額が年間数十億の人もいれば、生活保護で生活されている人も、生活保護をもらわずにもっと経済的に大変な暮らしをされている人、ホームレスの人、…。また、世界では、戦争とか紛争で、命の危機にさらされている人もいらっしゃる。一人ひとりの個人は、とても多様性のある存在で、社会は多様性ある存在の集まりでもあります。一人の看護師が体験できるのは、社会の中の極一部、小さな、小さな、点かと思っています（図1）。一人の看護師が体験できること、考えられることは限られていて、知らないこと、分からないことばかりです。

## 多様性ある社会における「当たり前」

そう思うと、「当たり前」や「普通」「当然」「常識」って存在するのかなのかと思えてきました。カンファレンスをしていて、「こんなの当たり前でしょ」とか、「普通はね」「一般的には」って言われると、「私は違う」って言えなくなったことはありませんか。でも、「一般的」って何なのかと考えると、何が一般か分からない。多様性のある社会の中では、「当たり前」は存在しないのが、「当たり前」なのかもしれません。「当たり前」が存在しないのにも関わらず、「当たり前」と思っている人が存在すると、Aさんの「当たり前」とBさんの「当たり前」が違っていている場合、Aさんは、Bさんと意見が対立したように思うかもしれませんが。意見が対立したと思った時に、「うれしいな」と思うでしょうか。私自身を考えてみると、意見が対立したとき、とっさには、何か心地よくないような感情、受け入れられないような、ネガティブな感情が起こってくるかなと思います。自分の「当たり前」が相手に受け入れられなかった場合、自分の当たり前を貫くには、他者と戦い自分の当たり前を受け入れられることが必要になります。それは、非常にしんどいように思います。

依存症者を感情的に受け入れられないとか、ネガティブな感情を抱くといった背景には、アディクションの問題を持っている方の多くが、「私に」とっての「当たり前」が、通用しない人ということもあるように思います。例えば、「お金がない時は買い物しないことは、当たり前」と思っている人にとっては、買い物依存症

の人の行動は、「当たり前」でないことになります。「お酒を飲んだら車に乗らないのは、当たり前」、実際にこれは本当に危くて人の命を奪うことにつながるのですが、アルコールの問題がある人に、「飲酒運転をしないのは当たり前」といっても通じません。危険ドラッグにしても、「普通は、危険ドラッグって使用しない」といっても、使用している人たちにとっては「普通」ではありません。

## アディクション問題へのかかわりとネガティブな感情

アディクションの問題にかかわると、当たり前が通用しないことが多く、感情がすごく動くように思います。アディクションにはいろんなアディクションがあると思うのですが、私自身は薬物依存症者たちから多くを教えてもらっているので、ここでは、薬物依存症に焦点を当ててお話しします。

薬物依存症者とかかわって、精神科だけじゃなくって、救急に危険ドラッグで運ばれた人への看護でも、アディクションの問題をもつ人から、助けたことを感謝されることは、あまりないのではないのでしょうか。何十年前ですけれども、救命救急で働いていたときに、夜間の交通事故で、アルコール臭がしている人は多かったですし、列車に飛び込まれた人は、既に腕に注射を打った跡があったり…。そういったとき、「アルコール飲まなかったら、事故することなかったのに」とか、「なんでこんなになるまでやめないの!」とか、いろんな感情が生じていたのを覚えています。

アディクションの問題を持つ人は、金銭的問題をかかえていたり、暴言、暴力があったり、攻撃的であったり、そういった人と接していると、私も、怒りを覚えたり、抑うつ的になったことがあります。約束したのに嘘をつかれ、空虚感に陥ったり。そういったネガティブな感情っていうのが喚起されやすいのかなって思います。看護師さんたちへのインタビュー調査で話を聞かせていただいた中でも、そういったことが語られました。

看護師さんのインタビューの中ですごく印象的だったのが、一生懸命、1人で、大きな身体で薬物依存症者に頑張って対応していた時の話です。その看護師さんが、「自分ではもう対応できない」って思ったときに、医師に「先生どうしたらいいですか」って助けを求めたら、医師からは「それは看護の仕事でしょ」って。そして、他のスタッフに助けをもとめようとしたら、なぜかわゴン押ししたりとか忙しそうにされたといっ

た、誰にも助けてもらえないつらい体験でした。このような体験をするぐらいならば、依存症の人とはかわらない方がいい。でも、逃げていたら駄目だと思っ

て、頑張っ

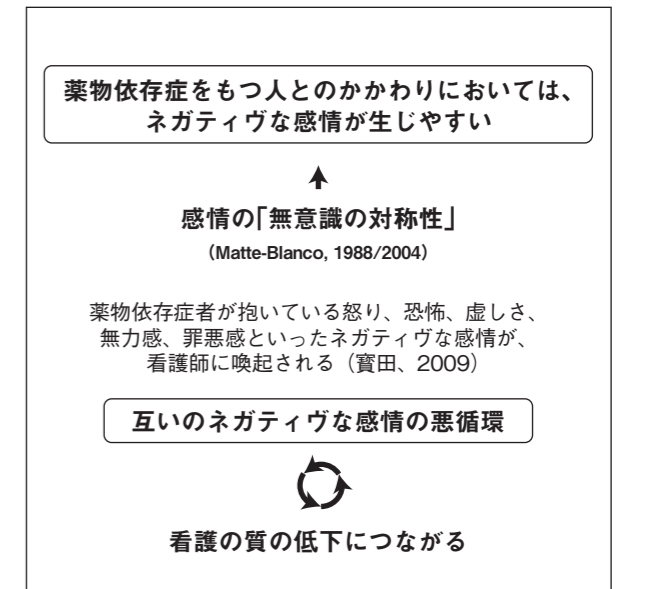


図2 患者-看護師の感情の無意識の対称性

## 同じ人間と感

話を聞かせていただいた看護師さんの中に、最初はあまりいい感情をいだいていなかったのが変化して、依存症のケアに前向きに取り組んでおられる方がいらしたので、その人たちにお話を聞かせてもらいました。その看護師さんたちは、全員ではありませんが、依存症のケアに携わるようになったのは本人の希望ではありませんでした。最初は、「なんで依存症の人がいる病棟に行かなきゃいけないんだ」というような思いでした。その人たちの語りからは、変化は一直線ではなくって、価値とか知識とか行動が、いろんなものの変化が混ざり合っ

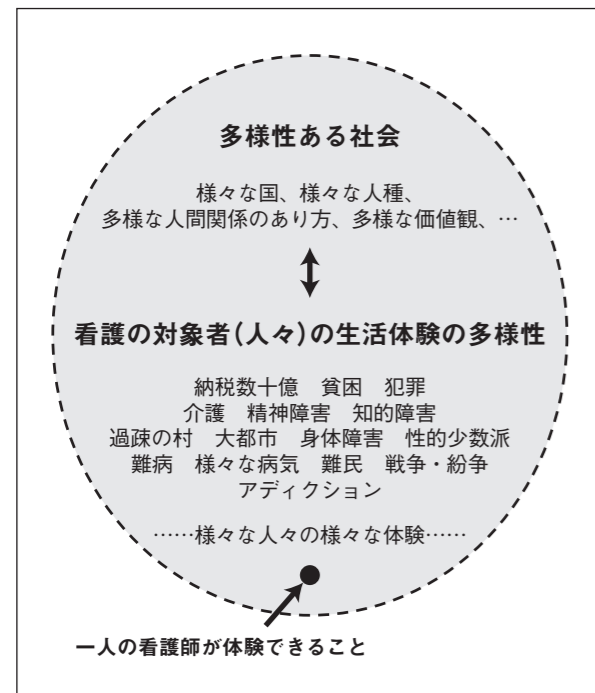


図1 多様性ある社会における人々の生活体験と看護師の生活体験

回復させようと思っていたのが、回復するのは患者さん自身だから、それをサポートするんだなというふうに、知識を得たり行動して関係性が変化していく中で、患者とかかわることで、薬物依存症者への看護に対する価値が変わって、かかわり方が変わっていくというふうな。

前向きにケアに取り組むようになった大きな変化として大きいのは、価値の変化かと思いました。依存症の患者さんっていうよりも、同じ人間だよなという。1年、2年の変化じゃなくって、長年をかけて、自ら気づき、患者観、人間観が変化してく。大切なこととしては、自ら気付くには、自ら気付けるようなサポートがあったということ。ネガティブな感情のままで、その変化がなかった人の語りは、周りからのサポートがなく苦しかったという体験で終わっているんですね。自分が困ったときに誰も助けてくれなかった。もう依存症の人と関わるのはこりごりだっている話で。変化した人っていうのは、依存症の人とかかわりで困っていたら、先輩がそっと見ていてくれて、助けてくれる話とかがあるのですよね。それは、大きな違いなのかなというふうに思いました。

また、前向きに変化していった看護師さんたちの多くが語ったことは、ともかく依存症の人のことが理解できない、なので、もう依存症の患者さん本人に教えてもらうしかない。患者さんに、素直に分からないと言うと、そこからいろいろな話しが聞けてくる。なぜ薬を使うのかとか、幼い頃の話とか。理解できないから、ともかく知識を得たいので、医師に聞いたり、研修会に参加したり。ともかく、知りたいので、自助グループのオープンミーティングに参加したり、ダルクを見学したり、とかっていうように。(図3)

薬物関連の問題が日本よりも大きい、アメリカ、サンフランシスコで、依存症のケアに携わっている看護

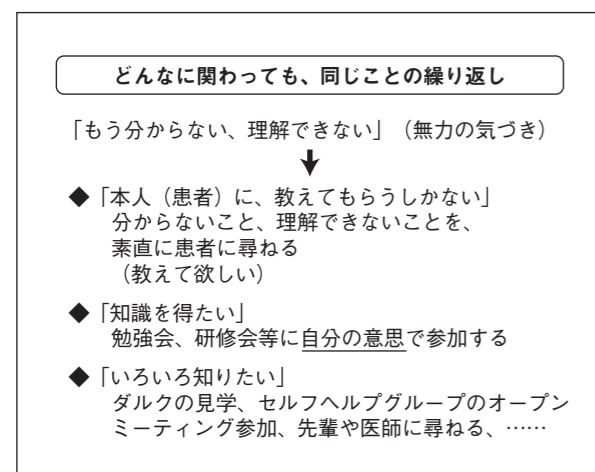


図3 依存症看護に前向きに取り組んでいる看護師の語りから

師さんたちにも、グループインタビューで、話を聞かせてもらいました、その語られた内容は、確かに、日本と比べて知識の面とか、教育は進んでいて、非常に学ぶことが多くありました。しかし、価値の変化という点では、共通点がありました。依存症の人と、かかわれば、かかわるほど、同じ人間として、大事な存在なんだという、人としての価値に気づかされる。患者さんとしてじゃなく、人間としてっていうところで。正直であることが大事だということも、共通していました。また、米国の看護師さんたちの話で、強調されたのは、non-judgement、裁かない、決めつけない。これは看護教育の中でも、強調されているようでした。

そこで思ったのが、多様性ある社会で、非常に多様な価値観や生活様式があって、分からない、理解できないことはたくさんあるのですが、同じ人間としての共通点があるんじゃないかなと。病気のことや、体験してこられたことは自分とは違う。でも、私も依存症者も同じ人間、人間であるっていうところは共通しています。依存症は、人間がなる病気。いくら様々であったとしても、人間としてのつながりがある。では、人間の本質って何かなということが大切なのかと。

依存症のことを勉強していくと、私の感情も変わっていきました。ある依存症者が語ってくれたのですが、子供の頃の夕食は500円玉だったと。お母さんは夜お仕事に行くので、家に帰ったら500円玉がおいてあって、それが夕食代。でもその夕食代もなくなってしまふ。お母さんが帰ってこなくなった。親密な人から見捨てられた体験のある人にとっては、人と親密になるのは怖い体験なんだと思いました。こういった理解の変化が生じると、感情も変化してきました。依存症者の体験は多様で、私の当たり前は通じないことばかり。でも、多様なのが当たり前というふうにとらえると、当たり前が通用しないことは当たり前。だからどうすればよいのかを考えていかなきゃいけないのかなというふうに考えています。

私の当たり前も、いろいろ存在します。私の当たり前が通用しない時、それは、これまでの私の価値観を見直したり、知識不足の点があるかを検討したりする機会かと思っています。私はどんな観点でみているのだろう、私には何が不足しているのだろうかと思うと、理解を深めていけると思います。薬物依存症の治療プログラムをいくら開発していても、そこに携わる援助者の感情が、そのプログラムの効果に関連すると思います。プログラムと、感情の取り扱いとの両方が動いていくのが大事かと思っています。

## 人の行動の変化に必要な他者のまなざし

私は、ウィニコットという精神分析家の考え方がすごく好きなのですが、といってもまだまだ曖昧な理解なのですけれども、依存症の人が、回復しようと思えるようになるのは、まずは、自分が存在している感覚が必要かと思います。ウィニコットがいうように(図4)、「存在すること (being)」の経験から、「創造的に生きる」能力が発達するのかなと思います。存在する経験が、回復にむけて「すること (doing)」、行動を導くのかと。看護師もまた、傷ついたり疲れたりしている中で、いいケアをしなさいというのは難しい。まずは、助けを求めた時に、誰かがまなざしを向けて応じてくれる、そこでようやく自分が存在しているんだなという。そこから、ケアすることが導きだされるのではないのでしょうか。

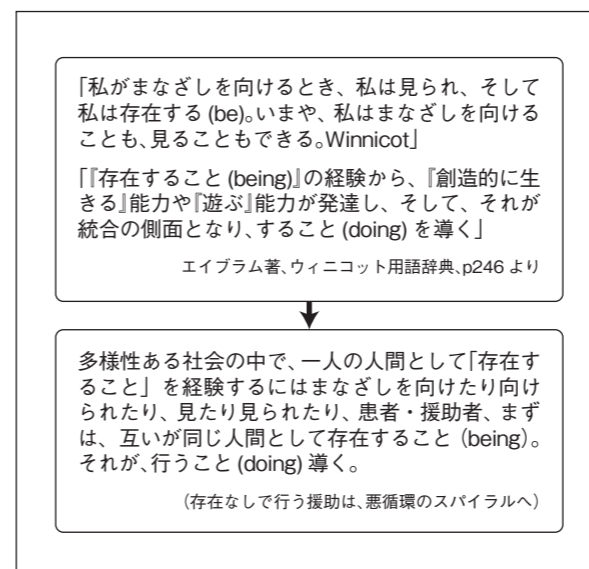


図4 多様性ある社会の中で「存在すること」「行うこと」

私は、今回、学術集会の会長を務めるのは初めてのことで、どうしようかどうしようかという状態でした。でも、精神看護学分野の教員に、どうしようかとまなざしを向けたら、理解してくれ協力してくれると。何かすごうれしくて、そしたらやっつけられるかなという思いになって。学部長や他の分野の教員に相談しても、ああ、いいよって。私がまなざしを向けたときに、何か返事が返ってきて、私はここに存在しているという思いになって、そうしたらやっつけような思いにつながるのかと。本当にありがたいなと思います。

多様性ある社会の中で、一人の人として「存在すること」を経験するには、やはりまなざしを向けたり向けられたり、見たり見られたりするという行為が、すごく大事なかなって。依存症者も援助者も、お互いが、

同じ人間として存在していくこと、何かそこから何の変化がおこってくるのかと。ですから、お互いが相手の「存在」を受け入れないと、悪循環のスパイラルに入っていくのかとも思いました。

この多様性のある社会の中で、お互いがそれぞれ異なる人間として「存在」するには、まずは、相互理解が大事なのかな。だから、「分からない」「理解できない」時には、相手の立場に完全に立つことはできていないのだから、教えてもらおう。理解することが難しいのだから、相手から教えてもらうしかない。その教えてもらう過程を通して、お互いがそこで存在する存在として、そして、何かすること、行うことが導き出されるのかなっていうふうに思いました。また、自分の「当たり前」で人をジャッジして、変化させようとする時、ネガティブな感情が生じ、すごいエネルギーがあるので、non-judgement な姿勢がすごく大事なかな、っていうふうに思っています。